

イエスは「気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために」(1 節)、たとえ話をしています。それによると、「神を畏れず人を人とも思わない裁判官」(2 節)でさえ、やもめの執拗な願いに堪りかねて裁判を引き受けるのだから、ましてや、私達を愛して止まない神が、昼も夜も叫び求めて祈っている人たちのことを放っておくはずがないという内容になっています。神が祈りを聞かれるとは、人間の願い通りになるということではありません。たとえ話の中でも、やもめは裁判こそ引き受けて貰えましたが、その判決が願い通りになったかどうかは記されていないのです。あくまでも祈りの聞き手は神の側ですから、それに対する応え方もまた神の側に委ねられます。それは時に、人間の予想をはるかに凌ぐ形であるかもしれません。少なくとも、私たちの祈りを聞いて、最も必要な形で「神は速やかに裁いてくださる」(8 節)のだとイエスは語っています。

阿佐ヶ谷教会の大宮溥牧師が、高校生のご長女：恵里さんを白血病で亡くされた時のことを記しておられます。「わたしは祈りの中で神様をさがしに行き、神様にしがみついて恵里を助けてください、恵里を返して下さいと祈りました。しかしちっともよくなりません。本当に自分の命をとって下さってもよいから、恵里の命を助けて下さいと祈りました。しかし聞かれないのです。神様の無慈悲さに怒りがこみ上げてくることもありました。…ところが、恵里が死んで、わたしの祈りが聞かれないまま終わった時、わたしはふと朝に夕に祈り続けて、神様と固く結び合わされている自分に気づきました。…祈りは子どものためよりも、自分のためでした。恵里は牧師である父を、神様とさらに深く交わらせるために、最後の役目を果たして召されたのです。わたしは厳粛な主の御業に居住まいを正す思いでした。」

思えば、弟子達の願い通りにはならなかった神の応えが、イエスの十字架死でした。しかし後になって彼らは、主の十字架によって露わにされた人間としての罪深さや弱さにこそ、イエスがこれまで語ってきた、人と人とが救し合い、つながり合い、共に生きていくための救いがあることに気づかされていったのです。それでもなお、どうせ祈っても無駄だという神への諦めや不信が、人の心のどこかには備わっているものです。イエスも「果たして地上に信仰を見出すだろうか」(8 節)と心配しています。しかし、理不尽な扱いを受け、十字架上で苦しみ叫ぶイエスは、昼も夜も叫び求めている者の苦しみに共感できない方ではありません。その主イエスが必死に語るのです。「気を落とさずに、祈りなさい」と。

(文責：望月達朗牧師)

